小学生が捉える体育科の学習成果に関する研究

－コンピテンシーに着目して－

内田　真生子　（　東京学芸教職大学院　）

１．目的

本研究では、コンピテンシーに着目して、学習者と学習者の意識に強い影響を与える教師が体育の学習成果をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とした。

２．研究方法

調査項目は「OECD との共同による次世代対応型教育（指導）モデルの研究開発プロジェクト」で作成された尺度（全 14 項目）を用いた。

研究Ⅰ：**「体育学習におけるコンピテンシーの育成可能性についての教師の意識調査**

１）対象者　全国の小学校教師(599 名)

２）調査方法　質問紙調査法(2019 年 12 月～2020 年 2 月)

３）分析方法　SPSS Ver25.0 を用いて、t 検定、一元配置分散分析を行った。

研究Ⅱ：体育授業における学習成果に関する児童の意識についての調査(2 ヵ年)

１）対象者 ①小学校第 5 学年児童(69 名)
②小学校第 6 学年児童(70 名)

２）調査方法 ①2019 年 9 月
②2020 年 9～10 月
単元事前・事後の質問紙調査、抽出児童 8 名に対するインタビュー調査を行った。

３）分析方法　質問紙のデータは SPSS Ver25.0 を用いて、t 検定、重回帰分析を行った。インタビューデータはトランスクリプトをカテゴリーに分類した。

３．結果と考察

【研究Ⅰ】

１）　多くの教師は体育学習において「協働する力」や「協力し合う心」の育成が可能であり、「批判的思考力」「より良い社会への意識」は育成することが難しいと考えていた。また全ての項目において、体育が研究中心教科である教師はそうでない教師に比べて得点が高かった。さらに、教職歴ごとに分類すると、最も高い数値を示したのは体育を研究中心教科とする中堅期の教師であり、ベテラン期においては研究中心教科別に比較した場合にも有意差が認められなかった。

２）2015 年時に行われた関口・宮澤(2016)の調査と傾向比較を行ったところ、本研究の調査では 2015 年時よりも 14 項目中 12 項目の得点が高く、新しい学力観についての概念が教師の間で一般に広がってきている可能性が推察された。

【研究Ⅱ】

１）児童は全てのコンピテンシーについて「身に付いた」という実感をもっていた。児童の成長実感を分析すると、コンピテンシーは相互に影響をし合いながら発揮・成長していることが明らかとなった（図１）。

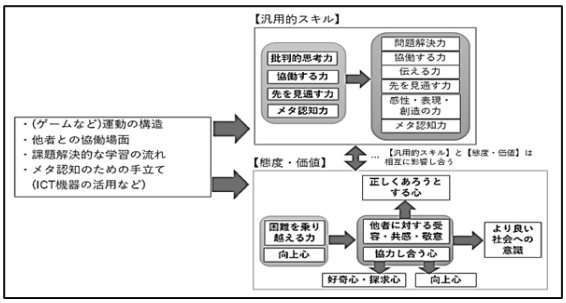

図１　コンピテンシーの発揮・成長モデル

４．結論

上記の結果から示唆された新しい学力観に基づいた体育の学習成果の捉え方についての構造モデルを示すことができたことが本研究の成果であり、教科横断的に学習者の成長に貢献する教科体育についての新しい知見である。

５．主な参考文献

１）東京学芸大学次世代教育研究推進機構，「OECD との共同による次世代対応型教育（指導）モデルの研究開発」プロジェクト研究活動報告書，2015～2017.